

日本語の感情動詞の構文的特徴について

王 雲姣

DOI: 10.18999/stul.36.57

1. はじめに

本稿は日本語の感情動詞の構文的特徴について考察するものである。日本語の感情動詞は対象にとる格などの構文的特徴から見ると、違う種類がある。例えば、(1)のように感情動詞の「憎む」は、(2)の動作動詞の「殴る」と同様にヲ格をとり、「花子」と「太郎」を交替させることにより、直接受身化はできるのに対し、交替使役化はできない。このことから、「憎む」の場合は動作動詞の「殴る」と同様に、共起するヲ格名詞の「太郎」は主体である「花子」の働きかける〈対象〉であり、「花子」の「憎む」〈原因〉ではないことが考えられる。

- (1)a. 花子が太郎を憎んだ。
b. 太郎が花子に憎まれた。(直接受身化○)
c.*太郎が花子を憎ませた。(交替使役化×)
(cf.「太郎が花子に次郎を憎ませた。」なら可。)
- (2)a. 花子が太郎を殴った。
b. 太郎が花子に殴られた。(直接受身化○)
c.*太郎が花子を殴らせた。(交替使役化×)
(cf.「太郎が花子に次郎を殴らせた。」なら可。)

一方、同じ感情動詞であるが、(3)のように「まいる」は二格をとり、直接受身化はできないのに対し、交替使役化はできる。使役文の使役主は当該事態を引き起こす原因であると考えられる。このことから、(3)の「まいる」の場合、「太郎」は花子をまいらせる〈原因〉であることが分かる。

- (3)a. 花子が太郎にまいった。
b. *太郎が花子にまいられた。(直接受身化×)
c. 太郎が花子をまいらせた。(交替使役化○)

このように、「憎む」は経験者の対象への働きかけが相対的に強く、動作動詞に近いのに対し、「まいる」は経験者の対象への働きかけが相対的に弱く、動作動詞から離れていることが分かる。そこで、本稿では格など構文的特徴の観点から感情動詞を分類し、感情動詞の働きかけ性について考察する。

2. 先行研究

次に感情動詞の格助詞に関する先行研究について論じる。これには、寺村(1982)や佐藤(1997)などがある。以下、これらについて順に見ていく。

2.1 寺村(1982)

寺村(1982)では、感情動詞の格と意味役割に関して、ニ格は〈誘因〉を表すのに対し、ヲ格は〈対象〉を表すとしている。例えば、(4)の「驚く」「怯える」「ぎよっとする」はニ格をとり、「物音」のために一時的に感情が動くのに対し、(6)の「愛する」「憎む」はヲ格をとり、「人」は心理的働きかけの対象であり、「感情の動きによって必ずしも影響を受けるわけではない」(p.143)という違いがあると論じられている。(5)(7)も同様である。

(4)物音ニ オドロク／オビエル／ギョットスル

(5)ソノ結果ニ 失望スル／ガッカリスル

(寺村 1982:140)

(6)人ヲ 愛スル／憎ム

(7)彼ヲ ウラヤム／ウラム／ネタム

(寺村 1982:142)

また、寺村(1982)は一部のニ格が〈対象〉を表すとも指摘している。例えば、(8)のように

「惚れる」は直接受身になり、「男」の「女」への働きかけを表すことから、「惚れる」の二格が〈対象〉という意味役割を表すことが分かる。

(8) 一女は男から好かれ、男から惚れられるものよ。

菊次はそういう。女のほうから惚れると必ず苦勞する、相手のよしあしにかかわらず、男には決して惚れるものではない、というのである。

(男ガ女ヲ好ク、男ガ女ニ惚レル)

(山本周五郎『なんの花か薫る』(寺村 1982:227))

2.2 佐藤(1997)

次に、佐藤(1997)は二格をとる感情動詞を対象に考察している。佐藤(1997)は主に寺村(1982)に従い、まず二格をとる感情動詞を直接受身化できるものをタイプ I とし、直接受身化できないものをタイプ II としている。その上で、交替使役構文からも考察している。

例えば、「感謝する」のようにタイプ I の二格感情動詞は(9b)のように直接受身化できるのに対し、「驚く」のようにタイプ II の二格感情動詞は(10b)のように直接受身化できない。このことから、タイプ I の二格は〈対象〉を表すのに対し、タイプ II の二格は〈対象〉を表さないとしている。一方、タイプ I は(9c)のように「花子」と「太郎」の 2 項を交替させることができないのに対し、タイプ II は(10c)のように「彼」と「東京の物価高」を交替させることができる。佐藤(1997)はこのような使役構文を野田(1991)に従い、交替型使役と呼び、主語は影響者であり、〈原因〉を表すとしている。このように、佐藤(1997)では、タイプ I は直接受身化できるのに対し、交替型使役化できないということから、その二格は〈対象〉を表し、〈原因〉を表さないとし、その一方で、タイプ II は受身化できないのに対し、交替型使役化できるということから、その二格は〈対象〉を表さず、〈原因〉を表すとしている。

タイプ I : (9) a. 花子が太郎に感謝した。

b. 太郎は花子に感謝された。(直接受身化可能)

c. *太郎が花子を感謝させた。(交替使役化不可能)

タイプ II : (10) a. 彼は東京の物価高に驚いた。

b. *東京の物価高は彼に驚かれた。(直接受身化不可能)

c. 東京の物価高が彼を驚かせた。(交替使役化可能)

2.3 先行研究の問題点と本稿の位置づけ

以上、感情動詞の格に関する先行研究を見てきた。上に述べたように、寺村(1982)では直接受身化テストを用いて感情動詞の格の意味役割を考察し、佐藤(1997)では直接受身化テストだけでなく、交替使役化テストも用いて考察している。しかし、両者いずれも二格の意味役割の考察に問題がある。寺村(1982)と佐藤(1997)では、感情動詞の二格は〈対象〉を表すものと〈原因(誘因)〉を表すものの 2 つに分けているが、一部の感情動詞の二格は〈原因(誘因)〉と〈対象〉のどちらか一方を表すのではなく、両方を表す場合もある。例えば、(11)の「呆れる」の二格は(11b)のように直接受身になるため、〈対象〉を表すだけでなく、(11c)のように二格名詞句「太郎」が使役文の主語になり、また、(11d)のように二格を「のせいで」に言い換えることができるため、〈原因〉も表すと考えられる。このように、寺村(1982)と佐藤(1997)は感情動詞がとる格の意味役割の一部を見逃している。

- (11)a. 花子が太郎に呆れた。
b. 太郎が花子に呆れられた。
c. 太郎が花子を呆れさせた。
d. 花子が太郎のせいで呆れた。

また、次の(12)のように感情動詞にはガ格をとるものもあるが、先行研究ではあまり論じられていない。

- (12)a. 花子(に)は太郎のことが飽きた。
b. 花子(に)は太郎のことがいやになった。

そこで、本稿はガ格をとる感情動詞の場合や、複合化した意味役割の場合も考慮に入れて、感情動詞の格と構文的特徴を考察する。

3. 考察対象となる感情動詞

本稿では具体的な対象語は以下の作業を経て得られたものである。

まず、工藤(1995:76-77)で挙げられた感情動詞 38 語と、山岡(2000:189-204)で挙げられた感情動詞 82 語を抽出し、重なった語を 1 語とし、合計 99 語を得た。このうち、本稿では感情動詞の対象／原因にとる格助詞(「私はあなたを恨む」や「寝付かない息子に困る」など)について考察するため、格助詞との関係が見えにくい次の i、ii の語を除外し、55 語を考察対象語とする。

- i. コーパス(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』BCCWJ)において、対象／原因にとる格助詞が現れる用例が 4 例以下のもの
語例:清々する、胸踊る、気が咎める、サッパリするなど
- ii. 対象／原因にヲ格またはニ格をとる場合、直接受身化も交替使役化もできないもの
語例:興味がある、関心がある
(14)a. 私はあの人に興味があった。
b. *あの方は私に興味があられた。
c. *あの方は私{を／に}興味をあらせた。

4. 感情動詞の格標示

本節では 55 語の感情動詞の格標示について、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を利用して、どのような格助詞をとるかを見る。コーパスから出現した用例が1つの格助詞(例えば、ヲ格)しかない場合はその格助詞のみをとるとし、2つまたは3つの格助詞(例えば、ヲ格とニ格)をとる場合はそのいずれもとる(例えば、ヲ／ニ格両用)とした。これをまとめると、表1のようになる。

表1 本稿における感情動詞の格標示

感情動詞の格助詞	語数と語例
ヲ	7 (恨む、憎む)
ヲ／ニ	17 (期待する、感謝する)
ニ	17 (飽きる、呆れる)
ヲ／ニ／ガ	1 (悩む)
ニ／ガ	10 (飽きる、困る)
ガ	3 (癩に障る、気になる)

表 1 のように、本稿で対象とした 55 語の感情動詞の格標示は、ヲ格をとるものが 7 語、ヲ／ニ格両用のものが 17 語、ニ格をとるものが 17 語、ヲ／ニ／ガ格をとるものが 1 語、ニ／ガ格両用のものが 10 語、ガ格をとるものが 3 語であった。次節では、本節で考察した格標示に基づいて感情動詞の格の意味役割と構文的特徴を見ていく。

5. 感情動詞の構文的特徴

本節では、感情動詞の格の意味役割と構文的特徴について見る。まず、ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものについては、本稿では 2 節で紹介した寺村(1982)や佐藤(1997)などを参考にして、直接受身化テストと交替使役化テストを用いて格の意味役割を判断することにより、構文的特徴を考察する。次に、ガ格をとるものは直接受身化テストや交替使役化テストがきかないため、意味や構文などの観点から考察する。最後に、ヲ／ガ格両用のもの、ヲ／ニ／ガ格をとるもの、ニ／ガ格両用のものについては、先の 2 つの考察を複合させて構文的特徴を考察する。以下、この順に見ていく。

5.1 ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものの場合

まず、ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものについて見る。本節では、2 節で紹介した寺村(1982)と佐藤(1997)を参考にして、直接受身化テストと交替使役化テストを用いて格の意味役割を判断することにより、その構文的特徴を考察する。

格の意味役割の判断については、直接受身化ができる場合は〈対象〉とし、交替使役化ができる場合は〈原因〉とし、いずれもできる場合は〈対象+原因〉とする。例えば、(15)のようにヲ格をとる「憎む」は直接受身化ができ、交替使役化ができないため、そのヲ格が〈対象〉を表すと判断する。(16)のヲ／ニ格両用の「感謝する」も同様である。

- (15)a. 花子が太郎を憎んだ。
b. 太郎が花子に憎まれた。(直接受身化○)
c. *太郎が花子を憎ませた。(交替使役化×)
(cf.「太郎が花子に次郎を憎ませた。」なら可。)
→ ヲ格:対象

- (16)a. 花子が太郎の来場{を／に}感謝した。
b. 太郎の来場が花子に感謝された。(直接受身化○)
c.*太郎の来場が花子に感謝させた。(交替使役化×)
→ ヲ／ニ格:対象

これに対し、(17)のようにニ格をとる「緊張する」は直接受身化ができず、交替使役化のみができるため、ニ格は〈原因〉を表すと判断する。(18)のヲ／ニ格両用の「焦る」も同様である。

- (17)a. 花子が面接官の質問に緊張した。
b.*面接官の質問が花子に緊張された。(直接受身化×)
c. 面接官の質問が花子を緊張させた。(交替使役化○)
→ ニ格:原因
- (18)a. 花子が結婚{を／に}焦った。
b.*結婚が花子に焦られた。(直接受身化×)
c. 結婚が花子を焦らせた。(交替使役化○)
→ ヲ／ニ格:原因

また、(19)のようにニ格をとる「呆れる」は直接受身化も交替使役化もできるため、そのニ格は〈対象+原因〉を表すとする。(20)のヲ／ニ格をとる「悲しむ」も同様である。

- (19)a. 花子が太郎に呆れた。
b. 太郎が花子に呆れられた。(直接受身化○)
c. 太郎が花子を呆れさせた。(交替使役化○)
→ ニ格:対象+原因
- (20)a. 花子が太郎の死{を／に}悲しんだ。
b. 太郎の死が花子に悲しまれた。(直接受身化○)
c. 太郎の死が花子を悲しませた。(交替使役化○)
→ ヲ／ニ格:対象+原因

このように意味役割を判断した結果を表 2 に示す。

表 2 ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のものの格とその意味役割

格助詞	意味役割	語数と語例
ヲ	対象	19 (考える、憎む)
ヲ／ニ		6 (気が付く、感謝する)
ヲ／ニ	対象+原因	10 (喜ぶ、恐れる)
ニ		2 (飽き飽きする、呆れる)
ヲ／ニ	原因	6 (照れる、苦しむ)
ニ		14 (困る、緊張する)

次節から、この意味役割の判断結果に基づいて、「ヲ格(／ニ格) 対象型」、「(ヲ／)ニ格 原因型」、「(ヲ／)ニ格 対象+原因型」の順に構文的特徴を考察する。本稿では、構文的特徴のイメージ図として、次の記号を用いる。

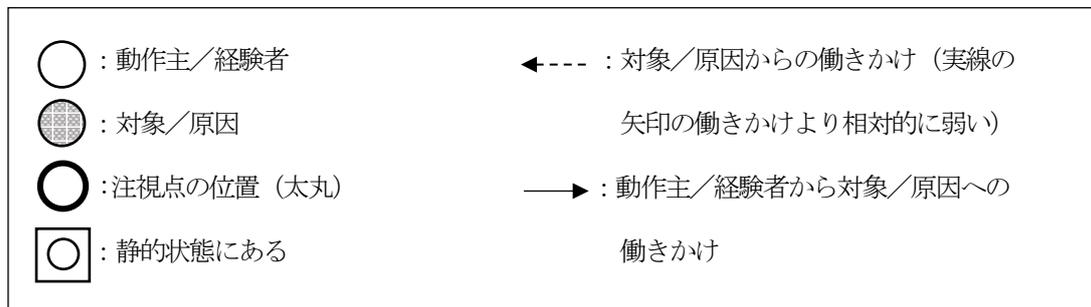


図 1 構文的特徴のイメージ図の記号

まず、感情動詞を見る前に、動作動詞の構文的特徴のイメージ図を見ておく。例えば、(21)の「花子は太郎を殴った」は動作主の「花子」が対象の「太郎」に働きかけることにより、太郎が「怪我する」や「頭に血が出る」などの状態変化が引き起こされることを表している。ここで働きかけの方向は動作主の「花子」から対象の「太郎」に向かっている。このことを以下の図 2 で表す。

- (21)a. 花子が太郎を殴った。
 b. 太郎が花子に殴られた。(直接受身化○ → 対象○)

c.*太郎が花子に殴らせた。(交替使役化× → 原因×)

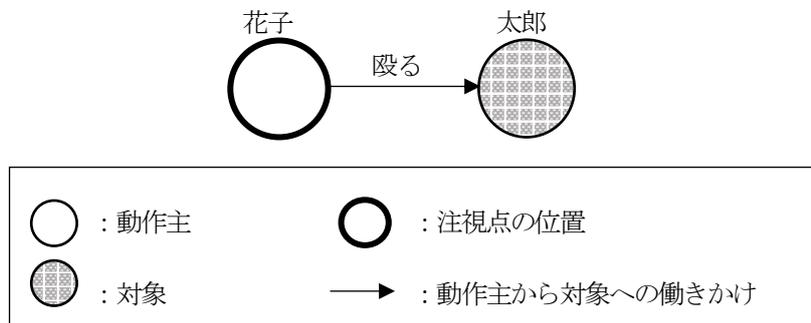


図2 動作動詞「殴る」のヲ格のイメージ

図2で白い丸は動作主を表し、灰色の丸は対象を表す。矢印は動作主から対象への働きかけを表している。また、太線の丸で注視点であるガ格を表す。以下、これに倣って感情動詞の構文的特徴について見ていく。

5.1.1 「ヲ(／ニ)格 対象型」

まず、「ヲ(／ニ)格 対象型」の構文的特徴について見る。本稿では、「ヲ(／ニ)格 対象型」の構文的特徴は大槻(2014)を参考にして、感情動詞の場合、経験者と対象との間の働きかけが双方向のものであるとする。

このうち、対象から経験者へ働きかける場合を「刺激」と呼ぶことにする。この場合、例えば(22a)を例にすると、太郎が花子を罵るなどして、花子に直接憎しみを抱かせる場合もあれば、太郎が直接花子に何かをするわけではないが、太郎が他の女の子を好きになって、花子が勝手に太郎に憎しみを抱くようになる場合もある。さらに、太郎は特に何も花子に憎まれるようなことをしていないが、花子が勝手に太郎が何かをしたと思い込んで憎しみを抱く場合もある。

一方、経験者から対象へ働きかける場合を「働きかけ」と呼ぶことにする。この場合、太郎は花子が自分を憎んでいることを知って、落ち込むような場合もあれば、太郎は花子が自分を憎んでいることを知らないまま憎しみを抱かれている場合もある。後者の場合も太郎は花子から目に見えない働きかけを受けていると考えられる。

(22)a. 花子が太郎を憎んだ。

b. 太郎が花子に憎まれた。(直接受身化○ → 対象○)

c.*太郎が花子に憎ませた。(交替使役化× → 原因×)

(22)の「憎む」は直接受身化ができるのに対し、交替使役化はできないため、ヲ格は〈原因〉ではなく〈対象〉を表すと考えられる。このことから、経験者の「花子」から対象の「太郎」への働きかけは、「太郎」から「花子」への刺激より相対的に強いと考えられる。そこで、経験者の「花子」から対象の「太郎」への働きかけは実線で表し、対象の「太郎」から経験者の「花子」への刺激は破線で表すことにする。また、経験者はガ格で表示され、注視点に立つため、太線の丸で表すことにする。

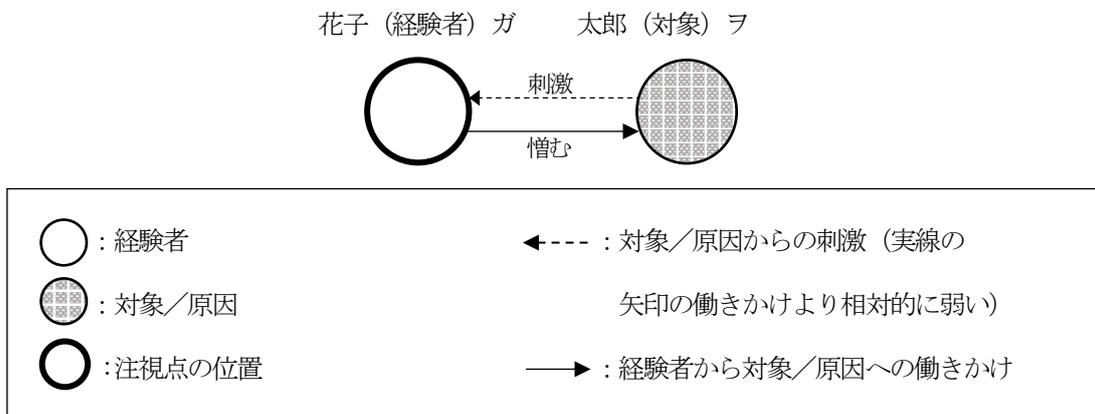


図3 「花子が太郎を憎んだ」におけるヲ格のイメージ

5.1.2 「(ヲ/)ニ格 原因型」

次に、「(ヲ/)ニ格 原因型」の構文的特徴について見る。本稿では、「(ヲ/)ニ格 原因型」の構文的特徴も先の「(ヲ/)ニ格 対象型」と同様に、大槻(2014)を参考にする。

例えば、(23)の「緊張する」のニ格が〈原因〉を表すように、経験者の「花子」は「面接官の質問」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされる。このように、「面接官の質問」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から「面接官の質問」への働きかけは意識が向かうだけであるため相対的に弱いと考えられる。そこで、原因の「面接官の質問」から経験者の「花子」への刺激は実線で表し、経験者の「花子」から原因の「面接官の質問」への働きかけは破線で表すことにする。また、経験者は注視点に立つため、太線の丸で表すことにする。

- (23)a. 花子が面接官の質問に緊張した。
 b. *面接官の質問が花子に緊張された。(直接受身化× → 対象×)
 c. 面接官の質問が花子を緊張させた。(交替使役化○ → 原因○)

花子（経験者）ガ 面接官の質問（原因）ニ

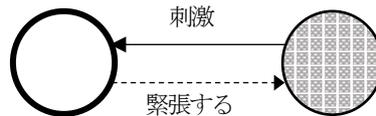


図4 「花子が面接官の質問に緊張した」における二格のイメージ

5.1.3 「(ヲ/)二格 対象+原因型」

次に、「(ヲ/)二格 対象+原因型」の構文的特徴について見る。「(ヲ/)二格 対象+原因型」は、〈対象〉の側面も〈原因〉の側面もある。

例えば、(24)のように、「喜ぶ」が直接受身化も交替使役化もできる。この場合、「息子の合格を喜ぶ」のようにヲ格をとると、「息子の合格」は「喜び」の〈対象〉として捉えられる。一方、「息子の合格に喜ぶ」のように二格をとると、「息子の合格」は「息子の合格の知らせ」という意味で解釈され、「喜び」の感情を引き起こす〈原因〉として捉えられる。

- (24)a. 花子が息子の合格{を/に}喜んだ。
 b. 息子の合格が花子に喜ばれた。(直接受身化○ → 対象○)
 c. 息子の合格が花子を喜ばせた。(交替使役化○ → 原因○)

このうち、〈対象〉を表す場合は、図5のように経験者の「花子」から対象の「息子の合格」への働きかけは相対的に強いのに対し、対象の「息子の合格」から経験者の「花子」への刺激は相対的に弱いと考えられる。

花子（経験者）ガ 息子の合格（対象）ヲ

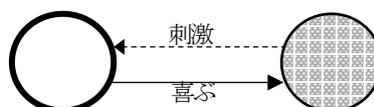


図5 「花子が息子の合格を喜んだ」のヲ格が〈対象〉を表す場合

これに対し、〈原因〉を表す場合は、経験者の「花子」は「息子の合格」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされるため、図 6 のように「息子の合格」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのにに対し、経験者の「花子」から「息子の合格」への働きかけは意識が向かうだけであるため相対的に弱い。

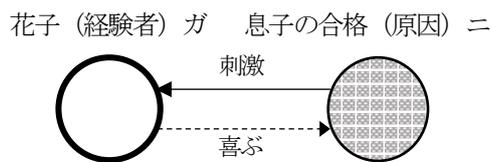


図 6 「花子が息子の合格に喜んだ」の二格が〈原因〉を表す場合

このように、「(ヲ/)ニ格 対象+原因型」は、経験者から対象/原因への働きかけと、対象/原因から経験者への刺激との相対的強弱度に揺れがあり、「ヲ(ノニ)格 対象型」に近い側面もあれば、「(ヲ/)ニ格 原因型」に近い側面もある。このことから、「(ヲ/)ニ格 対象+原因型」は「ヲ(ノニ)格 対象型」と「(ヲ/)ニ格 原因型」との中間的位置にあると考えられる。

以上、ヲ格をとるもの、ニ格をとるもの、ヲ/ニ格両用のものの構文的特徴について見てきた。これらの感情動詞の構文的特徴は、「ヲ(ノニ)格 対象型」、「(ヲ/)ニ格 対象+原因型」、「(ヲ/)ニ格 原因型」の順に経験者から対象/原因への働きかけが弱まり、対象/原因から経験者への刺激が強まることが分かる。また、「ヲ(ノニ)格 対象型」の感情動詞は動作主から対象への働きかけの方が強いという点で、動作動詞に接近していると思われる。そのため、「ヲ(ノニ)格 対象型」、「(ヲ/)ニ格 対象+原因型」、「(ヲ/)ニ格 原因型」の順に動作動詞から離れていくと考えられる。

5.2 ガ格をとるものの場合

次に、本節では、ガ格をとるものについて見る。5 節の冒頭で述べたように、ガ格をとるものの場合、直接受身化テストと交替使役化テストがきかないため、意味や構文などの観点から考察する。この型を「ガ格 対象型」と呼ぶことにする。「いやになる」「気になる」「癢に障る」の 3 語がある。

「ガ格 対象型」の場合は(25)のように、対象の「仕事」はガ格で表示され注視点となって

いる点で、ヲ格やニ格をとる感情動詞と異なる。(26)も同様である。

(25)私(に)は仕事がいやになった。

(26)私(に)は太郎のことが気になった。

また、森山(2008:68)は(27)(28)のような知覚や感情などの「経験的動作の対象がガ格で表された構文」について、「これらの経験的動作は無意識的動作であり、動力連鎖が意識化されないため」、「見る」「うれしがる」などの動きが背景化され、その代わりに対象からの知覚や感情などの「経験的刺激が前景化し動詞や形容詞で表現される」と述べている。即ち、経験者が自らの意志の存在を希薄化させ受け手のように表しており、対象から経験者へ視覚的刺激や感情的刺激が向かうというのが主な方向性であるということになる。

(27)私(に)富士山が見える。

(28)私(に)その一言がうれしかった。

(森山 2008:68)

このように、知覚動詞の「見える」や感情形容詞の「うれしい」と同様に、ガ格をとる感情動詞も経験者が自らの意志の存在を希薄化させ受け手のように表しており、対象から経験者へ感情的刺激が向かうというのが主な方向性であると考えられる。そのため、ガ格をとる感情動詞の場合、対象から経験者への刺激は相対的に強いのに対し、経験者から対象への働きかけは相対的に弱い。ゆえに、本稿では図7のように実線の矢印で対象から経験者への刺激を表すのに対し、破線の矢印で経験者から対象への働きかけを表すことにする。

例えば、(29)では対象の「太郎のこと」はガ格で表示されるため、図7のように注視点となっている。また、対象の「太郎のこと」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強いのに対し、経験者の「花子」から対象の「太郎のこと」への働きかけは相対的に弱い。そのため、実線の矢印で対象の「太郎のこと」から経験者の「花子」への刺激を表し、破線の矢印で経験者の「花子」から対象の「太郎のこと」への働きかけを表す。

(29)花子(に)は太郎のことが気になった。

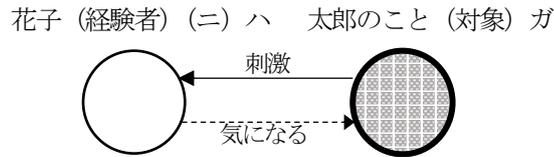


図7 「花子には太郎のことが気になった」におけるガ格のイメージ

このように、ガ格をとる感情動詞は対象から経験者への刺激は相対的に強いのに対し、経験者から対象への働きかけは相対的に弱い点で「(ヲ/)ニ格 原因型」と同様である。しかし、対象が注視点に立つ点でヲ格やニ格をとるものとは異なる。

5.3 ヲ/ニ/ガ格をとるもの、ニ/ガ格両用のものの場合

次に、本節では、ヲ/ニ/ガ格をいずれもとり得るもの、ニ/ガ格両用のものについて見る。これらの感情動詞はヲ格やニ格もとり得るし、ガ格もとり得る。ヲ格やニ格をとる場合は5.1 節と同様に、直接受身化テストと交替使役化テストを用いて格の意味役割を判断することにより、構文的特徴を考察する。また、ガ格をとる場合は5.2 節と同様に、意味や構文などから考察する。

本節では、ヲ/ニ/ガ格をいずれもとり得るもの、ニ/ガ格両用のものの構文的特徴を、「飽きる」類「ニ/ガ格 対象+原因型」と「困る」類「(ヲ/)ニ/ガ格 原因+対象型」の2つに分ける。以下、順に見ていく。

5.3.1 「飽きる」類「ニ/ガ格 対象+原因型」

次に、「飽きる」類「ニ/ガ格 対象+原因型」の構文的特徴について見る。この型は「飽きる」「感心する」「ウンザリする」「ビックリする」の4語ある。

まず、「飽きる」類「ニ/ガ格 対象+原因型」がニ格をとる場合は、〈対象〉も〈原因〉も表す。例えば、(30)のように、「飽きる」は直接受身化も交替使役化もできる。この場合、「太郎」は「太郎という人」と解釈されると、「飽き」の〈対象〉として捉えられやすい。これに対し、「太郎」は「太郎のやったこと」や「太郎の性格」などのように解釈されると、「飽き」の〈原因〉として捉えられやすい。

(30)a. 花子が太郎に飽きた。

b. 太郎が花子に飽きられた。(直接受身化○ → 対象○)

c. 太郎が花子を飽きさせた。(交替使役化〇 → 原因〇)

このうち、二格が〈対象〉と捉えられる場合は、図 8 のように経験者の「花子」から対象の「太郎」への働きかけは相対的に強いのに対し、対象の「太郎」から経験者の「花子」への刺激は相対的に弱いと考えられる。

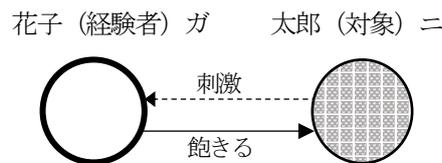


図 8 「花子が太郎に飽きた」の二格が〈対象〉を表す場合

これに対し、〈原因〉と捉えられる場合は、経験者の「花子」は原因の「太郎」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされるため、図 9 のように経験者の「花子」から原因の「太郎」への働きかけは相対的に弱いのに対し、原因の「太郎」から経験者の「花子」への刺激は相対的に強い。

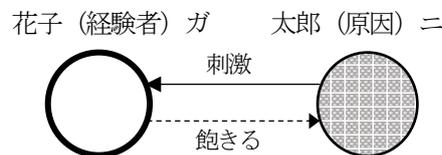


図 9 「花子が太郎に飽きた」の二格が〈原因〉を表す場合

このように、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」の二格が図 8 のように〈対象〉を表す場合は、経験者から対象への働きかけは相対的に強く、対象から経験者への刺激は相対的に弱い。これに対し、図 9 のように〈原因〉を表す場合は、経験者から原因への働きかけは相対的に弱く、原因から経験者への刺激は相対的に強い。

また、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」がガ格をとる場合は、5.2 節の「ガ格 対象型」と似ている。例えば、(31)では対象の「太郎のこと」はガ格で表示され、注視点となっている。また、経験者の「花子」が自らの意志を希薄化させ受け手のように対象の「太郎のこと」からの刺激を受容することを表し、「太郎のこと」から経験者の「花子」へ感情的刺激が向かうというのが主な方向性である。

(31) 花子(に)は太郎のことが飽きた。

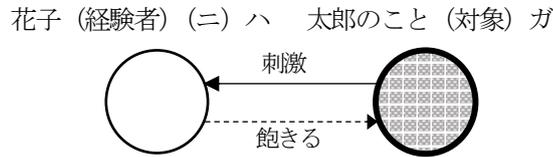


図 10 「花子(に)は太郎のことが飽きた」におけるガ格のイメージ

このように、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」は、「(ヲ／)ニ格 原因＋対象型」に近い側面もあれば、「ガ格 対象型」に近い側面もある。このことから、「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」は「(ヲ／)ニ格 原因＋対象型」と「ガ格 対象型」との中間的位置にあると考えられる。

5.3.2 「困る」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」

次に、「困る」類「ニ／ガ格原因＋対象型」について見る。この型はニ格をとり〈原因〉を表す場合もあれば、ガ格をとり〈対象〉を表す場合もある。

このうち、ニ格をとり〈原因〉を表す場合は、先の「(ヲ／)ニ格 原因型」と同様である。例えば、(32)のように「困る」はニ格をとる場合、直接受身化ができず、交替使役化のみができる。このことから、〈原因〉を表すことが考えられる。即ち、経験者の「花子」が原因の「泣き止まない息子」から刺激を受けることにより、心的状態の変化が引き起こされる。そのため、図 11 のように原因の「泣き止まない息子」から経験者の「花子」への働きかけは相対的に強いものに対し、経験者の「花子」から原因の「泣き止まない息子」への刺激は相対的に弱い。

(32)a. 花子が泣き止まない息子に困った。

b. *泣き止まない息子が花子に困られた。(直接受身化× → 対象×)

c. 泣き止まない息子が花子を困らせた。(交替使役化○ → 原因○)

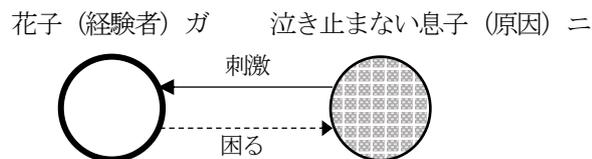


図 11 「花子が泣き止まない息子に困った」におけるニ格のイメージ

これに対し、ガ格をとり(対象)を表す場合は、先の 5.2 節の「ガ格 対象型」と同様である。例えば、(33)では対象の「充電器のないこと」はガ格で表示され、注視点となっている。また、経験者の「花子」が自らの意志を希薄化させ受け手のように対象の「充電器のないこと」からの刺激を受容することを表し、「充電器のないこと」から経験者の「花子」へ感情的刺激が向かうというのが主な方向性である。

(33) 花子(に)は充電器のないことが困った。

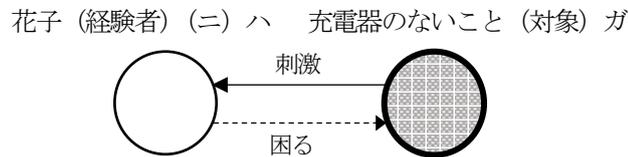


図 12 「花子(に)は充電器のないことが困った」におけるガ格のイメージ

このように、「困る」類「ニ/ガ格 原因+対象型」は「(ヲ/)ニ格 原因型」に近い側面もあれば、「ガ格 対象型」に近い側面もある。このことから、「困る」類「ニ/ガ格 原因+対象型」は「(ヲ/)ニ格 原因型」と「ガ格 対象型」との中間的位置にあると考えられる。

以上、ヲ/ガ格両用のもの、ヲ/ニ/ガ格をいずれもとり得るもの、ニ/ガ格両用のものの構文的特徴について見てきた。注視点の位置や、経験者と対象/原因との間の働きかけの強弱から見ると、「飽きる」類「ニ/ガ格 対象+原因型」、「困る」類「(ヲ/)ニ/ガ格 原因+対象型」の順に動作動詞から離れていく。

5.4 本節のまとめ

以上、感情動詞の構文的特徴について見てきた。経験者と対象/原因の間の働きかけ性の強弱、注視点の位置から順番に並べると、次の表 3 のようになる。

このように、感情動詞の構文的特徴類型は、①「(ヲ/)ニ格 対象型」、②「(ヲ/)ニ格 対象+原因型」、③「(ヲ/)ニ格 原因型」、④「飽きる」類「ニ/ガ格 対象+原因型」、⑤「困る」類「(ヲ/)ニ/ガ格 原因+対象型」、⑥「見える」類「ガ格 対象型」の 6 つに分けられ、順に動作動詞から離れている。

表 3 感情動詞の構文的特徴のイメージ図

格の型		図の番号	構文的特徴のイメージ図	用例
①	ヲ(ノ)ニ格 対象型	3	花子(経験者)ガ 太郎(対象)ヲ 刺激 憎む	花子が太郎を <u>憎んだ</u> 。
②	(ヲ)ニ格 対象+原因型	5	花子(経験者)ガ 息子の合格(対象)ヲ 刺激 喜ぶ	花子が息子の合格を <u>喜んだ</u> 。
		6	花子(経験者)ガ 息子の合格(原因)ニ 刺激 喜ぶ	花子が息子の合格に <u>喜んだ</u> 。
③	(ヲ)ニ格 原因型	4	花子(経験者)ガ 面接官の質問(原因)ニ 刺激 緊張する	花子が面接官の質問に <u>緊張した</u> 。
④	「飽きる」類 ニ/ガ格 対象+原因型	8	花子(経験者)ガ 太郎(対象)ニ 刺激 飽きる	花子が太郎(のことに) <u>飽きた</u> 。
		9	花子(経験者)ガ 太郎(原因)ニ 刺激 飽きる	花子が太郎(の行為)に <u>飽きた</u> 。
		10	花子(経験者)(ニ)ハ 太郎のこと(対象)ガ 刺激 飽きる	花子(に)は太郎のことが <u>飽きた</u> 。
⑤	「困る」類 (ヲ)ニ/ガ格 原因+対象型	11	花子(経験者)ガ 泣き止まない息子(原因)ニ 刺激 困る	花子が泣き止まない息子に <u>困った</u> 。
		12	花子(経験者)(ニ)ハ 充電器のないこと(対象)ガ 刺激 困る	花子(に)は充電器のないことが <u>困った</u> 。
⑥	ガ格対象型	7	花子(経験者)(ニ)ハ 太郎のこと(対象)ガ 刺激 気になる	花子(に)は太郎のことが <u>見えた</u> 。

6. 終わりに

以上、本稿では感情動詞の構文的特徴について考察してきた。考察した結果、以下の2点が明らかになった。

- I. 感情動詞の格標示には、ヲ格をとるもの、ヲ／ニ格両用のもの、ニ格をとるもの、ヲ／ニ／ガ格をとるもの、ニ／ガ格両用のもの、ガ格をとるものの6つがある。
- II. 感情動詞は格の意味役割などの構文的特徴の観点から、①「ヲ(／ニ)格 対象型」、②「(ヲ／)ニ格 対象＋原因型」、③「(ヲ／)ニ格 原因型」、④「飽きる」類「ニ／ガ格 対象＋原因型」、⑤「困る」類「(ヲ／)ニ／ガ格 原因＋対象型」、⑥「見える」類「ガ格 対象型」の6つに分けることができる。また、経験者と対象／原因の間の働きかけ性や注視点の位置から見ると、順に動作動詞から離れていく。

[参考文献]

- 杉岡洋子(1992)「心理述語についての考察」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』(24), pp.361-373, 慶應義塾大学言語文化研究所.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版.
- 野田尚史(1991)「日本語の受動化と使役化の対称性」『文藝言語研究 言語篇』(19), pp.31-51, 筑波大学文芸・言語学系.
- 森山新(2008)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』, ひつじ書房.

